

第四節 唐紙切の位置

一

本書（前節）中、葦手本と最も近い関係にあるのは伝藤原公任筆唐紙本和漢朗詠集切（本節では略称…唐紙切、略号…唐）であると述べた。さらに「唐紙切が藤原伊房（二〇三〇—一〇九六）の真筆、または伊房の時代の書であるということが事実であるならば葦手本は比較的純度の高い、唐紙切の本文にまで遡り得る性格を有していると考えられる」と推測した。

本節では、唐紙切の書写内容、表記、書の面に焦点を当てて唐紙切の位置付けを巡って考察を行った結果について報告を行い、またそれらの事例に基づき、唐紙切の書写者、書写年時に関する私見を述べる。

唐紙切について、調査し得た箇所を詩歌番号順に並べると以下の通りである。本節における調査はその範囲内とする。

277	11
279	26
・	31
(304)	33
・	68
(305)	77
315	94
・	97
(317)	101
318	108
・	110
321	113
334	133
337	136
	143
	152
	154
	228
	237
	(241)
	260
	265
	267
	269
	275

二

本調査の範囲内において、いずれかの伝本に存しない詩歌句数は八首（17・237・246・249・257・271・321・337）である（そこでは断簡等の切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する）。その八首のうち、唐紙切と諸伝本との関係を見るため、脱落、または追補である可能性が考えられる、いずれか一本のみが他本と異なる場合を除くと次の二首〔詩歌句等の有無〕①・②が挙げられる。括弧内には諸伝本の略号を挙げ、当該詩歌句の有無の区別を示す。

また諸伝本間に見られる排列上の異同の全てを挙げると次の【詩歌句等の排列】(1)・(2)・(3)の通りである。

【詩歌句等の有無】

① 17 有（雲・関・粘・伊・久・唐・山・葦）

無（卷・戊）

② 321 有（行大・粘・伊・久・唐・卷・山・多・戊・葦）

無（雲・関）

【詩歌句等の排列】

(1) 110・111（雲・関・粘・伊・久・卷・山・戊）

111・110（唐・葦）

(2) 137・143・133・136「卷上・春部」[躑躅]・「款冬」・「藤」〔雲・関・卷・山・戊・葦〕

143・133・136「卷上・春部」[款冬]・「藤」〔唐〕

133・143「卷上・春部」[藤]・「躑躅」・「款冬」〔粘・伊〕

(3) 273・272（雲・関・久・唐・卷・山・戊・葦）

272・273（粘・伊・多）

右の事例のうちの【詩歌句等の排列】(1)において唐紙切と葦手本のみが一致している点、及び諸伝本には粘葉本類（粘葉本・伊予切等）と雲紙本類（雲紙本・関戸本）とがある点は既に本書中、指摘した通りである。

粘葉本類と雲紙本類との違いのうち、顕著と言えるのは右の【詩歌句等の排列】(2)のことが挙げられる。卷上・春部巻末の三詩歌群の排列が「躑躅」・「款冬」・「藤」であるのが雲紙本類であり、「藤」・「躑躅」・「款冬」であるのが粘葉本類である。⁽³⁾

唐紙切の「款冬」に配された詩歌句については断簡であるため、その末尾に位置する143しか確認し得ないものの、その一首の存在により「款冬」の次は「藤」であることが判る。そこから唐紙切は雲紙本類等の伝本と同排列であった可能性がある

と言える。(3)の事例も唐紙切は雲紙本類と同排列である。

一方、【詩歌句等の有無】②は、雲紙本・関戸本にのみ存しない句である。しかしながら、諸伝本中、雲紙本・関戸本の二本にのみ存しない句数は一〇首に上り、当該句はその中の一首であり、②が唐紙切と粘葉本類との近しさを示す事例であると言い難い。それは当該句の下方に小字にて注されている注記の記載内容からも言えることである。唐紙切・大字切では「田」と注されており、久松切・戊辰切には「田達音」とあり、多賀切には「秋暮傍山行 田達音」とある。また山城切には「白或本田」とある。一方、粘葉本・伊予切には「菅」と注されている。当該句の出典は『田氏家集』であり、「田達音」・「田」等が正しく、粘葉本類に注されている「菅」は誤りである。ここから唐紙切は粘葉本類が有する321を有してはいないものの、その注記を受け継いでいないことが判る。むしろ【詩歌句等の有無】、【詩歌句等の排列】ともに唐紙切と同事象を有する十二世紀の書写とされる諸伝本（久松切・卷子本・山城切・戊辰切・葦手本等）との一致に注目すべきであろう。

次に、個々の本文に焦点を当てて考察を行った結果について述べる。

唐紙切と諸伝本との本文関係をみるために、和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字、及び漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い（例えば95「たれをらさらむ」と「たれおらさらむ」等）については実質的異同と同レベルでは扱えないため、本調査においては異同とは見做さないこととした。後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等についても原則、対象外とした。その考察結果は本書（前節）中、掲載した【諸伝本間の本文異同調査表】の通りである。⁵⁾

同表によると、唐紙切と諸伝本との本文関係の概略について、唐紙切と最も近い関係にあるのは葦手本であることが確認される。両本の近い関係が現れている事例も本書（前節）中、既に挙げた通りである。

唐紙切は葦手本と近い関係にあると言えるが、以下、述べる通り、唐紙切には久松切・戊辰切等、十二世紀の書写とされる伝本との同文箇所も存する。

以下、唐紙切の詩歌句を挙げ、当該本文に傍線を付し、その本文について、諸伝本間に見られる異同を示し、括弧内には当該本文を有する伝本の略号を載せる。

① 16 山風にとくるこほりのひまことにう(唐)⁶

〈同〉山風に(久・戌・葦)

〈異〉はるかせに(雲・関・卷・山)

たにかせに(粘・伊)

『古今集』所収の和歌である。『古今集』において「山風に」・「はるかせに」・「たにかせに」の本文が併存することはよく知られていることであるが、片桐洋一氏の指摘の通り、『和漢朗詠集』では、伝寂然筆本等、「少し時代の下るものに『やまかぜ』が多い」と言える。⁷

② 135 たこのうらのそこさへにほふゝちなみをかさしてゆかむみぬひとのため(唐)

〈同〉たこのうらの(久・戌・葦)

〈異〉たこのうらに(雲・関・粘・伊・卷・山)

『万葉集』・『拾遺集』・『古今六帖』・『人麿集』Ⅰ・Ⅱ所収の和歌である。いずれも当該箇所は「たこのうらの」であり、文意から「たこのうらに」は誤写と見られる。鎌倉時代、及びそれ以降の書写による『和漢朗詠集』諸伝本を調査した結果、著者の調査の範囲では「たこのうらの」を有する伝本の方が多いということが確認された。

③ 144 背壁灯残経宿焰開箱衣帯隔年香(唐)

〈同〉灯残(久・卷・山・戌・葦)

〈異〉残灯(雲・関・粘・伊)

『白氏文集』所収の漢詩である。『白氏文集』の当該箇所、「灯残」。木藤智子氏は「灯残」は鎌倉期の『和漢朗詠集』に見られ

る本文であり、「鎌倉期の朗詠集は原詩の形に校訂したのであらう」と述べられた。⁽⁸⁾

既に「灯残」が唐紙切等の平安時代書写本に見られることから当該本文が「鎌倉期」のもものと限定されないことは確かであるが、木藤氏のご指摘の通り、鎌倉時代、及びそれ以降の書写による『和漢朗詠集』では、「灯残」を有する伝本が数多く見受けられることは事実である。

次に和歌の表記のことについて述べる。唐紙切と葦手本・卷子本には和歌の真名書きが存する点において共通性が見られる。当該箇所を有する和歌を翻字すると以下の通りである。当該歌の末尾の括弧内にその和歌を有する伝本の略号を示す。

(1) 25 もゝしきの大宮人は仮あれや桜かさして今日をくらしつ (唐)

百敷の大宮人は仮有れや桜か指て今日は暮しつ (巻)

もゝしきの大宮人はいとまあれやさくらかさして今日をくらしつ (葦)

(2) 26 春は猶我にて知ぬ花盛心のときき人はあらしな (唐)

春は猶我にて知ぬ花盛意のときき人はあらしな (巻)

春は猶我にて知ぬ花盛心のとききひとはあらしな (葦)

(3) 258 天原振去見は春日在御笠の山に出し月かも (唐)

天の原ふりさけ見は春日なる御笠の山に出し月鴨 (巻)

天原振去見は春日在御笠の山に出し月かも (葦)

(4) 259 白雲に翼打かはし飛雁の影さへ見ゆる秋夜月 (唐)

白雲に翼打かはし飛雁の景さへ見る秋の夜の月 (巻)

白雲に翼打かはし飛雁の影さへ見る秋夜月 (葦)

(5) 260 世に経は物思年も無けれども幾度月に長目しつ濫 (唐)

世に経は物思年も無けれ輶月に幾度長目しつ嵐(巻)

(6) 273 心当に折早折む初霜の置迷はせる白菊花(唐)

意当に折はや折む初霜の置迷せる白菊の花(巻)

(7) 277 やまさひし秋も過ぬと告るかも真木の毎葉おける朝霜(唐)

山寂漠秋も暮と告鴨真木の毎葉に置朝霜(巻)

(8) 278 暮て行秋のかたみにおく物は我本結の霜にそ有ける(唐)

暮て行秋の遊影に置物は我本結の霜にそ有ける(巻)

(9) 315 十月鐘礼と共に甘南美の社の木葉は雨に去雨れ(唐)

無神月与時雨共に神並の紅葉社の木はの葉は雨にこそ雨れ(巻)

(10) 316 見人も無てちりぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり(唐)

見人も無て塵ぬる奥山の紅葉は夜の錦成けり(巻)

(11) 336 紅葉せぬ時はの山に栖鹿は己鳴てや秋を知らん(唐)

紅葉せぬ常磐の山に栖鹿は鹿は己鳴てや秋を知嵐(巻)

久曾神昇氏は「比較的書写年代の古いものは、仮名書の例のみであるが、少しく後れるものには漢字が用ゐられてゐる」とし、唐紙切について、伊房の手による「一〇九〇年頃」の書写と推定され、さらに「漢字の比較的多い伝本」に元永本古今集(以下、元永本と略称する)を挙げられた。⁽⁹⁾

元永本の和歌の表記については小林芳規氏により「平安後半期以後に加わった(と見られる)、和語の漢字表記のそれと一致する」という見解が示され、⁽¹⁰⁾さらに徳永良次氏は院政期、盛んに行われていた万葉集解読作業がそこに関係していることを指摘された。⁽¹¹⁾

また浅田徹氏により元永本は「詞書を中心に多くの漢字が流入してくるようになった時代に、そのことを逆に捉え返し、積極的に多くの漢字を和歌表記に引き入れることで、新たな表現を試みた作品」であると指摘された。⁽¹²⁾ 元永本は一一二〇年の書写であることが知られるが、和歌の真名書きという点において元永本の表記は唐紙切の表記と共通している。元来、「和歌は仮名で書くもの」であり、以上の表記（和歌の真名書き）は平安時代後期、「漢字との調和へ至る時代」⁽¹³⁾に行われたものと考えられる。仮に唐紙切の書写年時が「一〇九〇年頃」であるならば、唐紙切と元永本との間には三十年程の隔たりがあることになり、元永本に見られる当該表記を書の表現における新たな試みの一つであるという、その所論とは整合しないことになるのではなからうか。

以上、唐紙切は葦手本と近い関係にあることが改めて確認された。また唐紙切が久松切・卷子本・戊辰切と同文箇所を有していることも判明した。それらの本文は他の文献との照合がなされた結果、生成された可能性があり、その中のいくつかは鎌倉時代、及びそれ以降の書写による『和漢朗詠集』諸伝本の本文と一致していることも確認した。

さらに唐紙切と葦手本・卷子本には和歌の真名書きが存する点において共通性が認められた。久松切・卷子本は先学の研究により十二世紀の書写であると推定されており、⁽¹⁴⁾ 葦手本は一一六〇年の書写であることが知られる。一方の唐紙切については、以上の考察結果に照らし、果たして「一〇九〇年頃」の書写と推定し得るのか。唐紙切の書写年時はそれよりも下るのではないかと想像される。

三

次に唐紙切の書に関する考察結果について述べる。

小松茂美氏は唐紙切について藍紙本万葉集（以下、藍紙本と略称する）と同筆であり、その書写者は藤原伊房であると推定され、⁽¹⁵⁾ 島谷弘幸氏も唐紙切・藍紙本を伊房の真筆であると推定された。⁽¹⁶⁾ しかしそれを否定する説もある。⁽¹⁷⁾

伊房の真筆とされている作品には北山抄卷三・七（以下、北山抄と略称する）、及び藍紙本が挙げられる。¹⁸⁾

その書写時期について、尾上八郎氏による指摘がある。尾上氏は北山抄が「承保三年（二〇七六）」であり、藍紙本もその「附近の書写ならむか」と述べられた。¹⁹⁾

一方、北山抄と唐紙切とは「別筆なのではないか」という見解もあり、唐紙切が伊房の真筆か否か、未だ定説はない。また、唐紙切について、前述した通り、伊房による「寛治四年（一〇九〇）頃」の書写とする説がある一方、「若書き」とする説もある。²⁰⁾

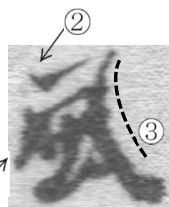
そこで伊房の真筆とされている藍紙本²²⁾を基準の一つとし、唐紙切の書との比較検討を行った。その結果、両本間には相違が確認され、また藍紙本の書の個性の強さが明らかとなった。以下、それが顕著に表れている事例（図版）を挙げ、両本間に見られる相違点について指摘する。その記述内容を含む類例について指摘する場合はその事例も掲出する。当該文字とともに二文字以上が続けて書されている場合は当該文字の上、または下に位置する文字も併せて掲出する。

一つの文字にいくつかの崩し方が存するが、以下掲出する事例ではその中のいずれかに限定する。また、その事例の中の当該箇所について説明を施す際、「矢印」・「点線」等と呼称する。

まず漢字について述べる。

■風(1)

藍紙本

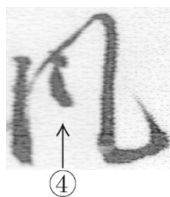


唐紙切

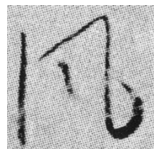


■風(2)

藍紙本



唐紙切



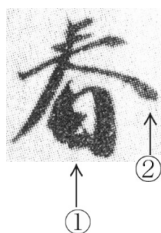
藍紙本・唐紙切の「風」には右の(1)・(2)等、いくつかの崩し方が存する。

(1)のタイプに関しては藍紙本では一画目(矢印①)が短いことが特徴として挙げられる。また藍紙本の二画目(矢印②)の起筆の鋭さ、及び点線③の反りの部分(内側に入る角度、線の太さ等)から力強さを感じられるが、そのような要素は唐紙切には確認されず、唐紙切の書は柔らかい印象を与えるものである。

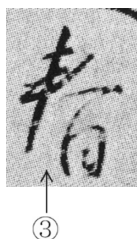
右の(2)のタイプについては、藍紙本では風がまえの中矢印④が上方に位置し、二画目(横画)に接したり、重なったりしている。しかし唐紙切の当該箇所の上方には余白があり、唐紙切にその特徴は見当たらない。

■春(1)

藍紙本



唐紙切



矢印①（「日」）に注目すると藍紙本ではその一画目が太く書かれ、当該文字（「春」）のほぼ中央に位置し、「日」には存在感がある。「春」の右払い（矢印②）について、右の事例では止めているが、藍紙本の「春」では次に例示することく、払う場合もある。前述した特徴はそこにも確認される（その特徴は「春」のみならず次に事例を載せる通り、「者」等にも見受けられる）。それに対して唐紙切では「日」がやや右方に位置し、その結果、矢印③の辺りに余白が生じる。唐紙切のとき余白を有する「春」は藍紙本には見出し得ない。

◇春(2)

◇者

藍紙本

藍紙本



■来

■来

藍紙本

唐紙切



①

矢印①が藍紙本では短く、またどちらかと言えば直線的であるが、一方の唐紙切の当該箇所ではゆったりと運筆されている。前述した矢印①に類する運筆は藍紙本において「木」・「米」・「珠」・「粟」等、他の文字にも散見されるが、それらの特徴

は唐紙切には見られないものである。

◇木

藍紙本



◇米

藍紙本



◇珠

藍紙本



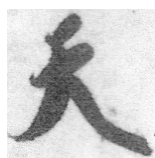
◇粟

藍紙本



■天

藍紙本



■天

藍紙本



藍紙本の右払いには矢印①のごとく重みがあり、かつ独特な曲線を描くものが混在している。藍紙本では矢印①に類する運筆が、次に挙げる「伎」・「受」・「伏」・「波」等、多数確認されるが、唐紙切の右払いにその特徴は見当たらない。

◇伎

藍紙本



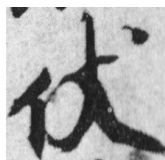
◇受

藍紙本



◇伏

藍紙本



◇波

藍紙本



次に仮名について述べる。

■ひ

藍紙本

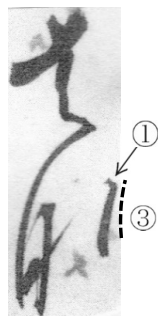
唐紙切



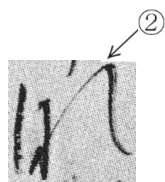
藍紙本の矢印①は唐紙切に比して高いところに位置している。また矢印②のごとく、鋭く右上方へ向けて突き返すような運筆も見受けられる。そのような特徴は唐紙切には見当たらない。唐紙切の書は穏やかな印象を与えるものである。

■ 那

藍紙本



唐紙切



前項において指摘した「ひ」と同様、「那」においても藍紙本では右側の部分（矢印①）が唐紙切の矢印②に比して、当該文字中、高い所に位置しているように感じられる。藍紙本の点線③は唐紙切の当該箇所よりも短いものであるが、それによつて矢印①の位置がより高く感じられる。

藍紙本の「れ」「能」等にもその特徴に類するものが存する。

◇ れ

藍紙本



◇ 能

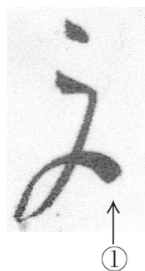
藍紙本



■の

藍紙本

唐紙切



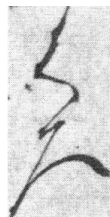
藍紙本では矢印①の辺りで運筆を止める事例が数多く見られる。藍紙本における、矢印①の辺りで止め、その後の運筆（回転部分）を省略するという特徴は、次に事例を挙げることく、「の」に限らず、「ろ」にも確認される。

また藍紙本「の」では、次の事例のごとく、矢印①の辺りで穂先を止め、直線的にその次（下方）の文字へと連綿が行われることがある。それは「の」に限らず、藍紙本では「あ」・「わ」等にも見られる特徴である。

一方の唐紙切には如上のごとき特徴は見当たらない。

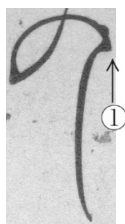
◇ろ

藍紙本



◇の

藍紙本



◇あ

藍紙本



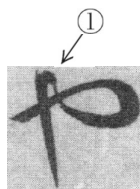
◇わ

藍紙本

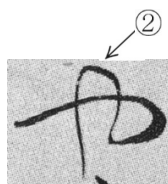


■ や

藍紙本



唐紙切



藍紙本の矢印①ではいわゆる逆筆により運筆されたことが窺われる。「や」におけるそのような筆遣いは唐紙切には見出し得ない。一方、唐紙切では、矢印②において、やや左上方へ向かう傾向にあり、ゆつたりとした印象を与えるものである。そのような特徴も藍紙本には見当たらない。

藍紙本の漢字の書の特徴には起筆の鋭さ、存在感のある画（縦画、右払い等）、直線的とも言える左払い等が挙げられる。仮名においても唐紙切には見出し得ない要素が藍紙本には存していた。藍紙本の「ひ」「那」等では、右側の部分が高い所に位置する傾向にあり、また、「の」の後半（曲線部）にも独特な運筆が確認された。漢字、仮名ともに藍紙本の書き振りは意的に感じられる。

一方、唐紙切の書は柔らかな印象を与えるものであり、藍紙本の書に存する鋭さ、力強さ等は唐紙切の書からは感受されなかった。

なお、『古筆学大成』には唐紙切の模写の図版も掲載されているが、その中においても本調査結果と異なる要素は見当たらなかった。

四

詩歌句の有無・排列、及び個々の本文について考察を行った結果、唐紙切は葦手本と近い関係にあることが改めて確認された。また、十二世紀の書写とされる久松切・戊辰切等と唐紙切との同文箇所も確認された。その中には出典との照合がなされた結果のものが混在していると推測する。一方、和歌の真名書きが存する点において、唐紙切と葦手本・卷子本には共通性が認められたが、その用字について、表記史上、院政期に行われていたことが先学の研究により指摘されている（院政期には作品の出典調査、校訂を行う作業が行われていた）。

本節では藍紙本（伊房の真筆とされている）との書に関する比較検討も行った。その結果、藍紙本と唐紙切との間には相違が確認され、藍紙本の書の個性の強さが明らかとなった。本節中、指摘した要素は唐紙切からは看取されず、唐紙切の書は藍紙本と対蹠的とも言える程、柔らかな印象を与えるものであった。

仮に、両本が伊房の真筆であり、藍紙本が「承保三年（二〇七六）」の「附近の書写」であるならば、唐紙切の書について、老熟の域に達したものと解することで、久曾神氏の所説（「二〇九〇年頃」の書写）に矛盾はないかと思われる。しかし、伊房の時代は摂関期から院政期への過渡期であることから、本節における書写内容、表記に関する考察結果から判断すると、むしろ唐紙切は十二世紀の書写と推測する方が自然ではないかと考える。

唐紙切を伊房の真筆であると推定するならば、実物調査がなされた上で真筆であることを裏付けける根拠（事例）が提示されるべきであろう。しかしその前に行うべきことは図版レベルにおいて唐紙切と藍紙本との相違を見出し、かつその考察結果を整理する作業であると考え、本考察を行った。

今回、調査し得た唐紙切の詩歌句数は一一〇首である。分量が少なく、未調査の部分は多い（調査し得た平安時代書写とされる諸伝本の詩歌句のうち、唐紙切は一三％程である）。その僅かな分量の中、唐紙切と葦手本・卷子本等との共通性を確認し得た。唐紙切が伊房の真筆か否かという問題について結論付けることはできないものの、世尊寺家の人々に受け継が

れた書写内容、表記を唐紙切が有していることは確かなことと考える。

注

- (1) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷〔平成2年 講談社〕、及び『泉屋博古日本書跡〕〔平成19年 泉屋博古館〕に拠る。
 - (2) 一首全体の姿が未確認である断簡についてはその番号を括弧に入れて示す(以下、同)。
 - (3) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究〕〔昭和55年 ひたく書房〕189頁
 - (4) 本書〔第一章第二節〕35頁
 - (5) 本書〔第三章第三節〕中、掲載。
 - (6) 唐紙切、断簡(和歌の途中で裁断されている)。
 - (7) 陽明文庫編集『陽明叢書 国書篇 第七輯 和漢朗詠集・新撰朗詠集〕〔昭和53年 思文閣出版〕10・11頁
 - (8) 木藤智子氏『平安時代における『和漢朗詠集』の書写と享受〕『百舌鳥国文〕第六号〔昭和61年 大阪女子大学大学院国語学国文学専攻院生の会〕
 - (9) 久曾神昇氏著『古今和歌集成立論研究編〕〔昭和36年 風間書房〕310頁
 - (10) 小林芳規氏『平安時代の平仮名文に用いられた表記様式(Ⅰ)〕『国語学〕四四集〔昭和36年3月 国語学会〕
 - (11) 徳永良次氏・元永本『古今和歌集』の漢字使用の側面(『築島裕博士古稀記念国語学論集〕〔平成7年 汲古書院〕所収)
 - (12) 浅田徹氏『元永本古今集を読むために―表記史と書道史―』(『国語文字史の研究〕一二〔平成23年 和泉書院〕所収)
 - (13) 前掲〔注12〕に同。
 - (14) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一三卷〔平成2年 講談社〕427頁
- 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷〔平成2年 講談社〕351頁

- (15) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷「平成2年 講談社」344～346頁
- (16) 島谷弘幸氏編著『料紙と書―東アジア書道史の世界―』「平成26年 思文閣出版」228頁
- (17) 堀部正二氏は唐紙切について「世尊寺伊房の筆に擬する説もあるが東大寺文書中の伊房真蹟に比して従ひ難い」と述べられた(同氏編著『校異和漢朗詠集』「昭和56年 大学堂書店」35頁)。
- (18) 前掲書(注15)に同。344～346頁
- (19) 尾上八郎氏著『平安時代の草假名の研究』「昭和18年 雄山閣」74頁
- (20) 山田勉・松本末穂両氏「伊房の書」『福岡教育大学紀要』第四四号「平成7年」
- (21) 飯島春敬氏は、「伝伊経筆歌集切などが若書きと解され、唐紙朗詠集切はその次の書写であつたろう」、「老年に至つて藍紙万葉集のような独特の様式を完成したもののようである」と指摘された(『飯島春敬全集』第六卷「昭和61年 書藝文化新社」284頁)。
- (22) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一二卷「平成2年 講談社」、飯島春敬氏解説・釈文『平安朝かな名蹟選集』第二二卷「平成4年 書藝文化新社」に拠る。

〔謝辞〕

本稿掲載の図版は講談社刊『古筆学大成』から引用したものである。同社には掲載のお許しを頂き、御礼申し上げます。